インクルーシブ教育実践推進校の取組について

～県立保土ケ谷高校の取組を中心に～

平成29年度～　通級指導導入校

令和６年度～　インクルーシブ教育実践推進校（Ⅲ期指定校）

◆所在地　横浜市保土ケ谷区川島町1557
◆創立　昭和54年1月
◆生徒数　803人(1年生:244人、2年生:297人、3年生:262人)

説明者：　県立保土ケ谷高等学校長　　逸見　育磨

「インクルーシブ教育実践推進校」

とは

共生社会 の実現に向け、

Who 知的障がいのある生徒が、

Why 高校で学ぶ機会を拡大するため、

How 特別募集（学力検査を実施しない入学者選抜）を実施し、

What （障がいの有無等に関係なく、）
全ての生徒が共に学び、共に育つことができる高等学校

段階的に、規模を拡大！

	平成29年度	令和2年度	令和6年度
指定校	パイロット校（3校） ■ 足柄 ■ 茅ケ崎 ■ 厚木西 （計3校）	Ⅱ期校（11校追加） ■ 城郷 ■ 霧が丘 ■ 上矢部 ■ 川崎北 ■ 津久井浜 ■ 湘南台 ■ 橋本 ■ 上鶴間 ■ 伊勢原 ■ 二宮 ■ 綾瀬 （計14校）	Ⅲ期校（4校追加） ■ 白山 ■ 横浜南陵 ■ 保土ケ谷 ■ 菅 （計18校）
合格者	全体（3校計） 790人	全体（14校計） 3,865人	全体（18校計） 4,902人
	連携募集（内数） 31人	特別募集（内数） 190人	特別募集（内数） 221人

すべての生徒が同じクラスで共に毎日を過ごす

学びやすい環境づくり

授業づくり
（わかりやすい授業）

チーム学校
（支援体制の充実）

施設整備
（リソースルーム等）

キャリア教育
（多様な進路の実現）

実践推進校の日常風景①　～国語の授業～

ティームティーチング

実践推進校の日常風景②　～数学の授業～

- 少人数授業の展開
- ティームティーチング
- 個別支援

実践推進校の日常風景③　～キャリアの授業～

リソースルーム

特別募集の生徒のみの授業

実践推進校の日常風景④　～部活動～

生徒の声

部活動で特別募集の生徒と
一緒に活動して大変なこともあったが、
その子の立場を考え、物事をいろんな視点から
見れるようになって**自分が成長できた。**

色々な人がいることが分かった。

お互いを理解するのは大変。

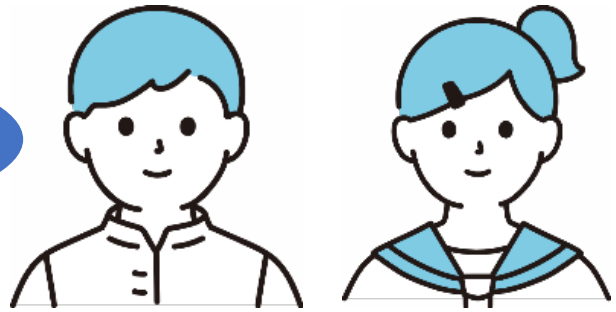
中学校までは授業が別で、色々な人と
関わることが出来ない環境だったが、
授業が全員ごちゃまぜで行われる
から**関わり方等を学べた**。

違いを受け入れるのは難しいので、
もっと早くからやるべき。

学びやすかった。

何を考えてるかわからない人と
関わるのは**怖いと思う。**

皆が**それぞれの違いを個性**として
受け止められるようになるといい。



障がいのある子の行動も日常
になってて、馴染んでて良いと思った。

教員の声

多くの教員が
新たな試みをする
ようになった。

高校だけで特別募集の生徒に係る
支援をゼロから考えるのは難しい。

生徒・保護者対応で、
今までより苦労する
ことはある。

チームで授業
をするようになった。

生徒の成長を感じられる
ことが増えた。

特別募集の生徒がいることが
あたりまえになっている。

進路担当者の業務負担が重い
現状はある。

異動による**ノウハウの継承**や
マインドの涵養に**時間がかかる。**

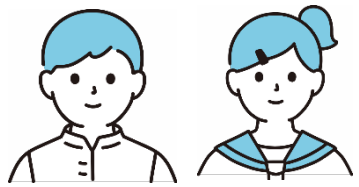
実習・進路先の開拓のための出張が多く、
時間が足りない。

生徒

◆ すべての生徒が障がいに関係なく高校教育に参加することで・・・

➡ 高校生として共に学ぶ経験から**成長**できた

➡ 相互理解への**意識の醸成**が進んだ

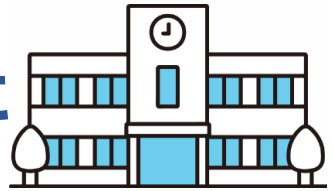


学校

◆ すべての生徒が障がいに関係なく高校教育に参加することで・・・

➡ **学校全体**で生徒を支援する体制が整備された

➡ 生徒に合わせた**多様な進路**を実現できた



共生社会の実現に向けて・・・

教職員の努力・工夫だけではない　環境の整備

■ 支援に係る業務を行うため 推進担当者や業務支援員の**増員配置** ■ 支援に係る業務を行うために必要な 専門性の高い**人材の育成** ■ 多様性を前提とした指導のために必要な 教員の**知識・経験・スキルの向上** 等	■ 様々な生徒対応のための学校施設改修 **バリアフリー**への対応化 ■ リソースルーム等の整備による **教室数の不足解消** ■ デジタル機器の整備は進んでいるが、 **ネット環境**などの改善 等

共生が当たり前の世界の実現

（全ての生徒にとって・・・）

誰もが大切にされ、

いきいきと暮らせる「共生社会」をめざして、

知的障がいのある生徒が高校で学ぶ機会をひろげながら、

みんなで一緒に過ごすなかで、

お互いのことをわかりあって成長していく

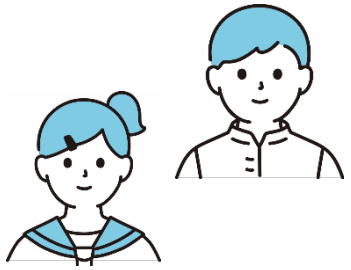
ことを目指します！

ともに生きる

「フルインクルーシブ教育推進市町村」（海老名市）の取組

説明者：教育局インクルーシブ教育推進担当部長　田所　健司

共生社会の実現に向け、高校の取組も重要だが・・・・



- 中学校までは授業が別で、色々な人と関わることが出来ない環境だった。
- 何を考えてるかわからない人と関わるのは怖いと思う。
- お互いを理解するのは大変。
- 違いを受け入れるのは難しいので、もっと早くからやるべき。

幼少期からの体験は重要であり、

就学の判断を行う**市町村と連携**した取組が必要

■ 令和6年3月29日

海老名市教育委員会と県教育委員会による協定の締結

（海老名市教育委員会との協定締結式の様子）

■ 令和6年5月13日

第1回　海老名市・県フルインクルーシブ教育推進会議

■ 令和6年6月15日、16日、23日

「対話の場『フルインクルーシブ教育～みんなで考えよう　海老名の教育～』」の開催

- 海老名市内 **6会場**（海老名市内の6つの中学校区）で実施
- 6回で市民ら延べ **180名以上** の方が参加
- 海老名市の目指す「フルインクルーシブ教育」の在り方について、**意見交換** を行った

「対話の場」における参加者の声

- 取組は**素晴らしい**と思う。
- 昔は普通級・支援級はなく、みんな一緒だった。**昔に戻る感じ**。
- フルインクルーシブ教育は、支援を更に厚くするのではなく、**通常級の在り方を見直していく取組**だと感じる。
- ありのままでいられる学校になってほしい。ほめるのではなく、**ありのままを認めることが大事**。
- 個々の気持ちがないと、**制度だけの整備では実現は難しい**と思う。
- 支援を受けたくて支援級に在籍しているのに、フルインクルーシブ教育では、いまの通常級に入れられることで、**支援が薄まってしまうんじゃないかという不安**がある。
- この取組は**35人学級ではハードルが高い**。クラスという枠をなくし、３年生なら３年生というまとまりの中で学ぶことができるといいと思う。
- インクルーシブ教育では**他の子との比較**から、自己肯定感が低くなったり、傷つかないかが不安。
- この取組は自分が経験していないから、**ゴールが見えない**。何をめざせばいいのわからない。

…etc